

南西諸島の環境利用と伝統文化

小林, 茂

<https://doi.org/10.15017/2235360>

出版情報 : 九州人類学会報. 14, pp.1-4, 1986-06-25. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

南西諸島の環境利用と伝統文化

小林 茂

南西諸島の伝統文化は、本土のそれから相対的に独立していると同時に、日本文化を古くにさかのぼって考えるに際して重要な意義をもつものと位置づけられて以来、多くの分野の研究者の関心をあつめてきた。民族学・民俗学にかぎらず、地理学・言語学・宗教学など、さまざまな領域からのアプローチがこころみられてきている。これらによって、その様相はかなりの程度まであきらかになったと言ってよい。

しかしながら、現在までの研究の蓄積をながめてみると、そこには重大な欠落がみとめられる。従来の関心は主として神話・儀礼・世界観・社会組織等の領域にかぎられ、とくにこれらの民俗的世界をささえてきた生業活動や生活技術の領域では、本格的な研究がきわめてすくない。

以上のような観点にたつて、発表者はここ数年来、南西諸島の伝統的環境利用を検討してきた。主としてイネ栽培と、石灰岩台地をはじめとする特異な土地・水文環境との関係に考察を集中している（小林、1984 参照）。この結果、南西諸島の伝統的環境利用の様相は、その伝統文化のいくつかの側面を理解するに際し、すくなくとも意義をもつことが知られるに至った。本発表の目的は、こうした見通しをもとに、これまでえられた知見を要約するとともに、それが示唆する伝統文化理解への展望を示すところにある。とくに農耕を通じた陸上の環境利用の特色を示しつつ、その農耕文化との関係に検討をくわえる。

1. 地形・地質構成と土地・水文環境

南西諸島の主要部は、いわゆる「琉球弧」の島じまにより構成されている。このうち大きな面積をもつものは、多くの場合北東から南西につらなる「琉球弧」の方向と調和的な長軸をもっている。その地形・地質も、これを軸にすれば理解しやすい。地質からみると、「琉球弧」は火山性の内弧と非火山性の外弧に区別される。両者はさらに細分されるが、いずれでも基盤となる地質は、弧の内側では古く、外側にいくにつれ新しくなる。島じまの地形は、こうした地質構造を骨格として構成され、巨視的にみれば、やはりゾーナルな配列を示す。まずもっと明りょうなのは、内弧の火山島列である。つぎは外側（太平洋側）の「第三系帯」で、ここでは島尻層群を基盤とする、琉球石灰岩（更新統隆起サンゴ礁）におおわれた低平な島が一般的である。これらの中間には、山地性の急峻な地形をもつ島や、やはり琉球石灰岩におおわれた低平な島が混在する。

以上のような秩序をもつ南西諸島の、奄美以南の地域の地形構成比をみると、山地（37.4%）について台地が大きな比率をしめる（32.1%）のが注目される。なかでも主として隆起サンゴ礁に由来する石灰岩台地の割合は大きく、全域の4分の1（27.1%）に達する。

石灰岩台地が注目されるのは、それが低平で開けた、南の島らしい景観をもたらすだけではない。特殊な水文環境をもつからでもある。石灰岩の透水性は高く、降水は地下に急速に浸透する。このため台地上では地表水にとほしく、また表層の土壌の乾燥もすすみやすい。これに対し、とくに山地・丘陵地になると、降水は地下にあまり浸透せず、地表を流下する。その起伏のある地形の谷間には、河川がみられる。

南西諸島の島じまを大きく「高い島」と「低い島」にわけようとする考え方の根拠には、このような両者の対照的な性格がある。伝統的環境利用の特色をみるに際しても、この区分が重要な意義をもつことに

なる。

2. 耕地・森林・人口密度

近世を中心とする時期の、南西諸島の土地利用に関する検討からまず言えるのは、主として石灰岩台地で構成される島で畑作が重要な意義をもつものに対し、それがすくない島では、水田におけるイネ栽培が主になるという点である。これは、それぞれにおける地表水の多少という点から理解されよう。とくに小さな石灰岩台地島の場合、その不足のため、水田の開発自体きわめて困難であった。もちろん主に石灰岩台地で構成される島でも、水田農耕がおこなわれてきたものはすくない。しかし、この場合も天水田など水利条件の良好でないものが多かったことが確認される。

つぎに指摘できるのは、石灰岩台地島あるいは石灰岩台地地帯における集約的土地利用密度（耕地率）が高いという点である。これはその平坦な地形がとくに畑作に適しており、開発が早くからすすんだ結果とみなしてさしつかえないであろう。そのため、この種の島や地域では森林がいちじるしく減退し、材木や燃料の不足が発生していた。

他方主として山地で構成される島や地域になると、集約的土地利用密度は共通してひくかった。これらでは耕作適地が谷間の低地にかぎられ、開発が全域に展開しなかったと思われる。これにともない急峻な斜面には森林がひろく残存し、そこからえられる木材資源はとくに石灰岩台地島に移出されていた。ただし先島諸島の大きな山地島の開発がおくれた点については、さらに別のファクターを考りよにのべる必要がある。そこでは、この地域の水文環境を背景にマラリアが蔓延し、人びとが居住することすら困難になっていたのである。これにともなって、石灰岩台地におおわれる島や地域から、この地域へ水田をもとめてイネのでづくり（「遠距離通耕」）がおこなわれた。

以上のような環境利用のちがいは、さらに人口密度の差にもむすびつく。石灰岩台地でおおわれる島や地域のそれは、他にくらべてかなり高かった。

3. 気候学的水収支と作物の作季

以上から島じまの地形・地質構成とそれにともなう水文環境の重要性が理解されるが、南西諸島の土地利用にとって、これにおとらず重要な意義をもつものは気候である。亜熱帯に属す奄美以南の南西諸島では、冬でも気温は本土ほど低下せず、降雪や降霜はきわめてまれである。また降水や水収支の季節的推移も、本土とちがうパターンをとる。

南西諸島の気候学的水収支がもつ大きな特色は、冬の湿潤と夏の乾燥にある。その冬は断続的な降雨をともなう、くもりがちの日がつづく。この間は日照がすくなく、気温が高くないので、蒸発散は低下する。降水量は他の季節より多くないとはいえ、このひくい蒸発散をうわまわり、安定した湿潤な状態をつくりだす。他方晴天がつづき高温となる梅雨後の夏期は、逆に蒸発散が降水量をうわまわり、乾季としての特色をもつ。くわえて、この後の季節の水収支も特徴的である。台風によるまとまった降水がなければ、早ばつが発生しやすい。

イネ・アワといった南西諸島の伝統的主要作物の作季が、本土のそれと大きくちがひ、秋冬に播種し、梅雨あけに収穫をむかえるというパターンをとるのは、このような水収支や台風の来襲を背景として理解されるべきものであろう。イネを例にとれば、水が決定的な意義をもつ田植は冬の湿潤期に、おなじく出

穂は梅雨期に基本的に終始する。そして真夏の乾燥期に収穫をむかえる（小林・中村、1985）。南西諸島のイネの第2期作が、古くは一部にかぎられ、収量が不安定であったことも、こうした気候推移をみればよく理解される。台風の来襲にくわえて、水収支の不安定な時期にそれはおこなわれてきたのである。

4. 土地利用と農耕文化

以上でえられた展望をもとに、南西諸島の農耕文化の理解に際しえられる示唆をいくつか示してみよう。まず関心がひかれるのは、畑作農耕についてである。南西諸島の農耕において、畑作の比重が高く、その伝統が重要な意義をもつことが指摘されている（佐々木、1976）。これはまず何よりも石灰岩台地の環境利用にむすびつけて理解されよう。南西諸島の環境の重要な一角を構成する石灰岩台地を十分に利用することは、畑作物なしには不可能と言ってよい。その高い人口支持力も、これを除外して考えることはできない。考古学的知見は、これが古く先史時代にさかのぼる可能性を示している。沖縄本島を中心とする、石灰岩台地地帯に立地する貝塚時代後期～グスク時代の遺跡から、畑作物の遺物がイネのそれとならんで発見されている（安里、1969など）。

つぎに注目されるのは、農耕儀礼である。南西諸島のそれには、畑作儀礼がイネ栽培のそれにならんで重要な意義をもつことのほか、本土のそれと比較して儀礼の実修時期が早いこと、イネの第2期作に関与するものがないことなど、重要な特色がみとめられることが指摘されてきた（伊藤、1974, pp. 23-32）。これらについても、以上からその背景が容易に知られよう。すでに示したような畑作農耕の役割は、それに関する儀礼の重要性に対応する。また前節で示したような特色をもつ作物の作季は、儀礼の実修時期に対応せざるをえない。さらにイネの第2期作に関連する儀礼が登場しないことは、それが地域的にかぎられ、しかもマイナーなものにすぎなかったことをぬきに語ることはできない。

農耕儀礼についてえられる示唆は、これにとどまらない。『琉球国由来記』の記載によりその分布が検討されている（小川、1972など）が、とくにイネに関与するものと、畑作に関与するものを対比して考える場合、前節までの検討は、重要な理解のいとぐちを提供する。畑作儀礼しか記載のない場合、あるいはイネの儀礼としながら実質的にアワの儀礼を記載している例は、いずれも水田農耕の可能性の小さい石灰岩台地地帯のものなのである。こうした視点から、『琉球国由来記』の記載をさらに検討する余地は大きい。本来畑作物の儀礼でありながら、イネのそれとして記載された場合が、他にもすくなくあつたのではないかと想定される。

以上、南西諸島の自然環境とその伝統的利用の特色をいくつか示し、そこからえられる伝統文化理解への示唆をみたが、両者にわたるさらに多方面におよぶ検討から、より多くの成果がえられる可能性は大きい。これによって従来とはちがった角度から伝統文化を再検討したり、その形成に関与したファクターを特定したりすることもできるように思われる。

<付記> 本発表の主要部分は、小林（1985:86）としてすでに発刊されている。詳細はこれらを参照していただきたい。なお本発表のもとになった研究の一部には三島海雲記念財団より授与された学術奨励金を使用した。記して感謝したい。

文 献

- 安里 進(1969):「沖縄における炭化米・炭化麦出土遺跡」『考古学ジャーナル』32,pp.10-16.
- 伊藤幹治(1974):『稲作儀礼の研究』而立書房。
- 小川 徹(1972):「沖縄年中祀の歴史地理学的一考察」『法政大学文学部紀要』18,pp.27-44。
- 小林 茂(1984):「奄美諸島の<高い島>と<低い島>」『九州人類学会報』11・12 合併号, pp.39-40。
- (1985):「南西諸島の土地利用に関する文化地理学的研究」『第22回事業報告書』(三島海雲記念財団)、pp.189-193。
- (1986):「南西諸島の環境利用と伝統文化」水津一郎教授退官記念事業会編『人文地理学の視
圈』大明堂、pp.529-39。
- 小林 茂・中村和郎(1985):「南西諸島の伝統的イネ栽培と環境」九学会連合<日本の風土>調査委員
会編『日本の風土』弘文堂、pp.167-206。
- 佐々木高明(1976):「南島における畑作農耕技術の伝統」九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄 — 自然
・文化・社会』弘文堂、pp.25-40。